

Hands-On 展示におけるインストラクターの役割 —科学技術館 FOREST を題材に— *

松浦 匡 (学籍番号 200621336)

研究指導教員：戎崎俊一

1. はじめに

科学技術館（東京都千代田区）FOREST は、「遊び」「創造」「発見」の森と題された展示室群で、5階の全展示室と4階の1展示室の総称である。製作に当たっては、当時のプロデューサー全員がほとんど無意識に Hands-On 展示を目指した。Hands-On 展示においては、展示物に関する説明は置かれず、来館者はとにかく手に取り、触って、何かを試すことが奨励される。科学技術館 FOREST の場合も、説明文をほとんど置かない方針が貫かれた[1]。ただし、インストラクターと呼ばれる女性スタッフを配置し、来館者を誘導することにした。インストラクターは展示の解説者ではなく、FOREST という「森」に棲む「妖精」であり、来館者に対して「いたずら」を仕掛けて、一緒に展示を楽しむという役割を設定された。このような意図の「インストラクター」を置いたのは、当時としては大変珍しい試みであった。

上記のインストラクターによる「業務日報」の解析から、FOREST においては、「科学の動態展示」とも言えるような現象が頻繁に起きていることに気付いた。動態展示とは、展示したいものの本来の機能を保持した状態で展示することであり、本来の用途としての動作・運用を可能とした状態で保存・展示することによって、展示物のあるべき姿を見せることができる。本研究においては、「科学の動態展示」とは、いきいきとした科学研究の営みの機能を保持したまま展示することと定義する。

科学研究は、一般に、

- 1) 観察による仮説立案
- 2) 試行による仮説検証
- 3) 結果の公開と議論

4) 法則としての確立
の四段階を経て進行すると考えられている[2]。したがって、「科学の動態展示」は、仮説立案・検証のサイクルと、結果についての議論の要素を含んだものでなければならない。

2. 研究方法

2.1 業務日報の分析

科学技術館を運営する財団法人日本科学技術振興財団科学技術館事業部の協力をいただき、2006年10月1日から2007年9月30日までの一年分の FOREST 業務日報を閲覧した。年末年始の休館日が6日、日報の欠損が4日分あり、この期間の業務日報の総数は355報であった。

2.2 インストラクターへの聞き取り調査

リーダーを含む現役インストラクター2名に、インストラクターの役割やFOREST内で好きな場所、あまり好きではない場所についての聞き取り調査を行った。また、元インストラクターで現在は館スタッフの1名にも、インストラクターの役割についての聞き取り調査を行った。

2.3 現場での観察

2007年12月18日から24日までの一週間および2008年1月13日に、5階の7展示室を中心に観察を行った。特に、業務日報から抽出した展示物でのやり取りについて、実際にそのようなことが起こっているかどうか確認した。

3. 結果

3.1 業務日報の分析結果

業務日報のうち「来館者の言葉、意見他、スタッフから見た来館者の様子」欄には、インストラクターと来館者のやり取りについて多く記述されていた。一般にインストラクターは、FOREST 内のどこで起こった出来事なのかについて、この欄に展示室名を記載することが求められているが、特別なことがなかった日については「全体」として一日の所見を記し、逆に個

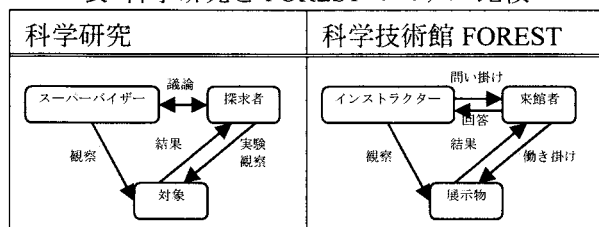
* “The role of “Instructor” at the Hands-On styled exhibition –for the case of “FOREST”, Science Museum, Tokyo-” by Kyo MATSUURA

別の展示物に関して特記したいことがあった場合にはその展示物名を記していた。イリュージョン（特に「座標の部屋」）、メカ、オプト、オリエンテーリング（特に「オオサンショウウオ」および「スタッフカウンター」）の各展示室・展示物についての記述が多かった。

特に個別の展示物名を挙げて報告されることの多い展示物について、よくあるインストラクターと来館者のやり取りを分析すると、インストラクターによる「促し」「観察」「問い掛け」「働き掛け」といったインタラクションに応じ、来館者が「観察」「試行」「議論」「発見」といった自らの行動によって展示物に働き掛け何かを発見しているというサイクルが抽出された。

これは、来館者が科学の営みを体験している一つの形であると考えられる。科学研究の多くの場合、研究対象に実験や観察という働き掛けを行う探求者の他に、指導者であるスーパーバイザーがいる。FOREST においては、来館者による発見を生み出すきっかけとして、インストラクターがスーパーバイザーに近い働きをしている（下表）。つまり、この点において、「科学の動態展示」が機能している。

表 科学研究と FOREST のモデル比較



3.2 聞き取り調査の結果

FOREST におけるインストラクターの役割は、来館者と共に楽しみ、過度に何かを教え込むようなことはしないということで元職・現職を問わず彼女たちの認識が一致している。

インストラクターの活動のしやすさは、展示室・展示物によってかなり大きな差がある。業務日報に記載される頻度の高い展示室については、インストラクター自身も確かに活動しやすいと感じており、来館者と共に楽しめる空間となっている。他方、活動しづらい場所も存在しており、それらの展示室については確かに業務日報にも現れにくくなっている。

3.3 現場での観察結果

業務日報に頻出する展示室においては、確かにインストラクターと来館者のやり取りが数多く見られた。

インストラクターは基本的に展示室間を巡回しており、「森」のあちこちで「道案内」を行っている。しかし混雑時には人手が不足する。

4. 考察・議論

科学技術館 FOREST において、インストラクターと来館者の間でうまく話が展開していく展示と、そうでない展示が存在していることが分かった。うまく話が展開していく場合においては、展示物が適度な不完全性を持っており、それを補完する役割をインストラクターが果たすことによって、来館者自らが「発見」を体験し、「科学の動態展示」が実現されている。

展示物がそれ自体では不完全であり多義性を持つことによって、複数の楽しみ方が可能となり、色々な仮説が浮かび、またそれらを突き合わせて議論・検証する余地が生まれる。逆に、自由度のない状態、つまり空間的にあれこれいじり回すこともできず、あるいは最初から分かりきったただ一つの筋道を歩まされる場合においては、観察・試行・議論といったプロセスを自ら辿る実感に乏しいので、「科学の動態展示」における自らの「発見」にも到達しがたい。

「科学の動態展示」という目的を実現するためには、来館者が自ら展示物に働き掛け、その結果として体験を獲得することが重要なのであり、過剰に教え込んではならない。したがって、インストラクターの立場においては、教えるのではなく、一緒に遊ぶ、つまり来館者と同じ目線で同じ思考・試行をすることで、様々な「促し」を与え、納得に至ってもらうことが重要である。

文献

- [1] 山田英徳：科学展示に関するいくつかの試み — 科学技術館・フォレストを例に一、1998年度明治大学学芸員養成課程紀要, pp.19-27, 1999.
- [2] 戎崎俊一：科学とは、科学, 71 巻, 12号, pp.1586-1589, 2001.